

7 エッチングのための図柄（下絵）の転写



写真左から：
スケッチ（280×380）
反転コピー紙で包んだ銅版
弁柄
赤褐色コンテ（サンギン）

エッチングの制作で、下絵を作らなかつたり、転写をしないで制作をするということはないだろう。そこで、図柄を転写する方法として私の仕方を述べる。

グラウンドを塗布する前に次のような準備をしておく。それと、図柄の回りに余白のある図柄（下絵）を用意する。銅版に図柄を重ね、余白の部分を裏側に折り込む。四辺を折り込むのは、転写を部分的に忘れたとき同じ位置に図柄を重ねることができるからである。その図柄には50～70ミリ四方の升目を引いておく。このようにすることで、転写作業中に図柄の用紙がずれず、転写もれもなくなる。

反転した図柄が必要であれば、そのような図柄を準備する。一般には、トレーシング・ペーパーで写し取り、裏から再度トレースする方法がとられる。私はコピー機で、たとえ白黒のスケッチであっても、カラーの反転コピーを取って転写に用いている。また、パソコンで反転した後、プリンターで印刷したものを使用してもよいだろう。

図柄を銅版の大きさに折り込んだら、銅板を取り出して製版の準備をする。銅版はグラウンドを塗布してテーパーで燻して定着させておく。そして、図柄の裏には赤褐色コンテ（サンギン）、または弁柄を擦りこんでから余分な粉を払い落とす。転写用の筆記具は色ボールペンを用いる。一度で上手く転写ができない場合は、再度銅版を準備し直して別の色に変えて転写する。

転写が終えた銅版は、ウォーマーや電熱器、あるいはガスの遠火で加熱し、図柄をグラウンドに定着させて急冷する。その後、描画に入る。



1. 銅版はグラウンドを塗布する前のもので、図柄はスケッチを反転コピーしたものである。銅版の大きさは構図に合わせて切り取ったもので、16.5×20ミリの1.2ミリ厚になる。



2. 先に図柄の余白の一辺を折り込み、図柄を下にして銅版を重ねる。さらに、残りの余白を折り込んで、図柄の構図と版面が合うように包む。



3. 写真は、銅版を反転コピー紙で包み込んだ状態。



4. 升目を引くことで、中断した際や転写もれがあった場合は見つけやすい。この後、銅版は一旦取り出し、グラウンドを塗布してテーパーで燻しておく。



5. 転写の準備ができた銅版（グラウンドを塗布して燻した後、水に浸けて急冷したもの）。



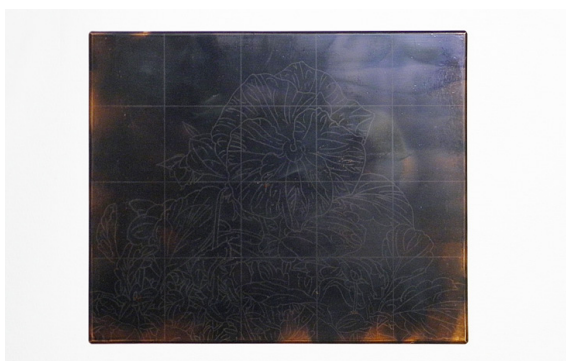
6. 写真は、図柄の裏にサンギンをまんべんなく塗りつぶした状態。この後、タンポなどで擦りこみ余分な粉を払い落とす。



7. 銅版のグラウンド膜を傷つけないように、サンギンを擦りこんだ図柄で包んで転写を行う。升目は定規をそっと乗せて軽く引く。描画にはボールペンを使用して一定の力で行う。その際、ハンド・レストを用いるとよいだろう。



8. 写真は転写を終えた銅版。この後、ウォーマーあるいは、プレート・ホルダーなどを用いて電熱器やガスの遠火で加熱する。そして、グラウンドに転写したサンギンの図柄が溶け込んだら急冷する。転写をして図柄を定着した後、描画に入る。



9. 写真は転写した版をガスの遠火で熱して定着させ、プレート・ホルダーのまま水に浸け急冷した版。これで、描画に入れる。

赤褐色コンテのサンギン及び弁柄を用いた転写

赤褐色コンテのサンギンと弁柄を用いて転写したグラウンドの版面は、一見すると見づらい様に思われるが、他の白色顔料などよりは実用的である。弁柄は、脱脂綿と綿布で作った小さなタンポで擦りこむ。説明ではサンギンを用いたが、広い面なら弁柄がよいだろう。



描画に際して

ニードルで描画を進めていくと、グラウンドのかすができる。せっかく描いた線がそのかすで埋まってしまうので、こまめにブラシで取り除く。それにはパステル用のブラシを使うとグラウンド膜を傷つけないですむ。また、市販のニードルは柄が長いので、扱いやすくするために、ある程度短く切り落



としてもよいだろう。それから、細い線で描く際には、シャープペンシルのホルダーに縫い針を差し込んで使うこともできる。写真のニードルの中で柄に緑の印しが見えるものがそれである。ノズルを取って、少し太めの縫い針が差し込めるようにしている。